

ニーゴ好感度逆転モノ

村岡8bit

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんか色々重いサークルに入っちゃった！

しょうがないにやあ……俺が全員救ったらあ！

お、なんか知らんけど全員救えたわ。だけど皆距離感近くない？近いよね。

アイエエエエエ!?ナンデ!?なんで皆急に無視するの!?なんで近寄るなっていうのお

おおお!?なんか嫌われたんだけどおおおお!↑イマココ

目次

プロローグ	1
空気の重厚感といふかなんといふか	
5	
学校へ行こう!	8
お家デートつてことで	20
暴力系ヒロインは時代錯誤	32
番外 I F : 暁山瑞希の後悔	42
その香水のせいだよ	52
から元気つてこーういふことかあ! ……	
あ、違う? そう ……	66

プロローグ

どうして、どうしてこうなってしまったのだろうか。

俺は間違えなかったはずだ。

君が皆を救うというから、俺は君を救った。

君が絵を描きたいというから、俺は君の隣に居た。

君が認めてほしいというから、俺は君を受け入れた。

君が救けてというから、俺は君を見つけた。

最適解を選んできたはずだ。

寄り添って、一緒に笑ったり、泣いたり、怒ったり、悩んだりしたはずだ。

君達は俺と一緒に居たいと言ってくれた。

だから、俺も君達と一緒に居たいと望んだ。

それなのに、なんで君達は――



『これからは必要なこと以外で話しかけないで』

急な出来事だった。何を言っているのか理解出来ない。脳が理解を拒んでいた。

「け、K?何を言ってるんだ……?」

『2度も同じこと言わせないでよ……金輪際、曲作り以外のことで私達に話しかけないでって言ってるの……!』

普段の彼女からは想像できない怒気の籠もった強い口調。そんなんだから、ああ本気で言ってるんだな、とすぐに理解しまった。

『そういうことだから、分かった?分かったなら今すぐ消えて。不愉快』

「なんでそんなこと言うんだよ……えななん……」

声が震える。やめてくれ。そんな悲しいこと言わないでくれよ。

「わけ分かんねえよ……!なあ……amia……!」

『キモいし不快。あーあー、早くどつか行つてくんないかな』

駄目だ。視界が滲んだ涙でボヤケてしまう。ああもう。何も見えないや。……それでも、最後の希望に縋り付くように俺は言葉を絞り出す。

「……ゆき……!」

『…………気持ち悪い』

その瞬間、おれの全部がぶつ壊れた。

真つ暗な部屋に一人、やけにうるさく聞こえる秒針の音と、キーボードの打音だけが心の安らぎだ。

安らぐことの出来る心なんて、とうに持ち合わせていないのだがな。

「……ハッ」

アホくさ、思わず失笑が口から漏れた。

奏たちの拒絶を受けて早くも一週間。俺はほぼ惰性で作業をしていた。

音楽サークル、25時、ナイトコードで。通称ニーゴのメンバーとして活動してきて一年以上、このような事態は初めてだ。俺はもうどうしたらいいのか分からなかった。

一日目はまだ受け止めきれなくて、ずーっと泣いてた。

二日目はただただ、ボーツとしてた。奏達に嫌われた。その事實は受け止めきれたけれど、やっぱり辛かった。

三日目になると流石にやらかなきやマズイと感じ、作業に取り掛かった。その間ずっと聞こえる皆の会話の幻聴がやかましくて、作業どころの話じゃなかったんだけどな。

瑞希がコロコロと笑う声、絵名が呆れたようについたため息、その様子をみて苦笑い

する奏、そしてよく分かっていないまふゆ。

全てがとてつ織細で、リアルなものだった。全く要らないリアルさだよ、こんなん。

長い間苦楽を共にした、大事な大事な仲間たち。それは、俺の人生において一番の宝物と言つても差し支えのないものだった。

そんな、大切な人たちに突如として嫌われ、全てを否定された。そんな俺の心中は誰にも計り知れないだろう。

さて、これからどうしたものか。

……曇くもり 愉ゆたろう太郎、高校2年生。早くも人生の希望を失ってしまった模様。

空気の重厚感というかなんというか

ニーゴのボイスチャット、音声上でも分かるほどに険悪な空気がそこには漂っていた。

その原因は、言うまでもなく俺だろう。

つい先日までは入るのが怖くて、ボイスチャットに繋げず一人で作業していた。

しかし、ぼっち作業には限度がある。ボイスチャットを繋げてリアルタイムで情報を交換しあいながらの作業の方が目に見えて効率がいいのだ。

ついに一人での作業に限界を感じた俺は、意を決してボイスチャットへと入ったわけなのだが……

「な、なあK……MI X作業、終わったぞ」

『……ハア……じゃあさっさとファイル投げてよ』

Kの刺々しい言葉が心に突き刺さる。心臓が強く締め付けられたみたいだ。

「わ、分かった……」

その言葉を最後に、沈黙が流れる。メンバー全員が別々の作業をしているので、このように誰も喋らない静かな時間は昔から存在する。

昔のそれはとても心地が良くて、安心感のあるものだった。誰も言葉を発さないけれど、皆確かにそこに居るのがわかる程の温もりがあったんだ。

しかし、今はどうだ。安心感なんて微塵も感じやしない。ただただ重苦しいだけの空間だ。

『……ツチ』

時々聴こえてくるえななんの舌打ちが鼓膜に突き刺さる。辛いよ。……今日はだめだ。もう耐えられない。

『……ごめん。今日はもう落ちる』

そう言つて、通話の切断ボタンへとマウスのカーソルを動かす。

『あつそ、耳障りだからさっさと消えてくれない？』

通話を切断した。

次の瞬間、上腹部あたりがぐるぐると渦巻くような感覚に襲われる。やばいトイレ行かなき——

「お、え、え、え……うっ……ぐふっ……うあ……」

急いで席を立ち上がったがもう遅い。床にぶちまけてしまった。口から垂れる残滓がピチャピチャと水音を立てている。

ここ数日で、完全に嘔吐癖がついてしまった。ストレスが全部ゲロに変換されて出てきてしまう。全く嫌な癖だ。

「……………うがい」

ズルズルと重い足取りで部屋を出て、うがいをなるべく洗面所へと向かう。

洗面所の扉を開くと、目の前には大きな鏡があった。

鏡に写った自分の顔を見つめる。

「……………ひつでえ顔」

碌な睡眠も食事も取らず、入浴もしない。そんな半ば廃人のような生活をしてきたからか、頬は痩せこけ目には隈ができている。髪だつてバサバサだ。

「……………取り敢えず、シャワー」

今後のこと、もつと真剣に考えなきやいけないな。そう思いながら、シワだらけでも何日も着替えていない服を脱ぐ。

俺は一体、これからどうすればいいんだよ……

学校へ行こう!

ボンヤリと視界に色が付き、意識が覚醒する。

朝だ。何故か枕の位置が足元に来ているが、気にしないでおこう。

昨日はゲロしてシャワー浴びたあと、結局すぐに寝てしまった。

疲れてたからとかそういうわけではなく、ただ何も考えたくなくて睡眠という逃げの一手を取ったんだ。

全く、真剣に考えなきゃとかほざいてたのはどの口だよ。そうだよこの口だよ。

寝ぼけ眼を擦りつつ、体を起こす。まだ少し、意識がポワポワしている。

「ふわあ……ねみ」

大きく欠伸をかいてみるが、眠気は取れない。

叔父さん曰く、俺の寝覚めの悪さは母親譲りのものらしい。まあ今現在、それが本当なのか確かめる術はどこにもないんだが。

フロアリングにペタリと足をつけると、ヒンヤリとした感触が足裏に伝った。

今日はよく冷える。寒さ対策をしつかりしないと風邪をひいてしまいそうだ。

こんな日の朝には、電気ポットで沸かしたお湯と、スティックのインスタントコーヒーをマグカップの中で混ぜ合わせたくなる。

電気ポットに水道水をつぎ、ボタンを押す。

お湯を沸かしている間に、台所にある収納棚の中からスティックコーヒーとマグカップを取り出しておこう。

間もなくしてお湯が湧いた。マグカップの中にスティックコーヒーの粉を入れ、お湯をそそいでいく。すると、お湯から出てくるもわつとした蒸気が顔に掛かって、頬を湿らせた。

椅子に座って、コーヒーを啜りながらまだボンヤリとした脳みそで思案する。

”何故急にニーゴのメンバーから嫌われてしまったのか”

俺が何かやらかしたのだろうか……？いや、心当たりが全くない。

じゃあなんで……

「……考えるだけ無駄か」

結局直ぐに思考を打ち切り、席を立つ。コーヒーはまだ飲み切っていないが、これは胃に収まらなさそうだ。

「……学校、行かなきゃだよなあ」

ハンガーラックに掛かっている制服のブレザーを手に取りながらそう呟いた。

一週間程前からずっと無断欠席している学校、教師や同級生からの携帯への不在着信はもうすぐ3桁を超えるところまで来ている。流石にそろそろ学校に行かなければ進級すら怪しくなってくるだろう。

「天気悪い……」

Yシャツの袖に腕を通しながら、ふと窓の外を見る。土砂降りの雨だ。どんよりとうごめく雲を眺めていると、こちらの気分までどんより落ち込んでしまいそうになる。

シャツのボタンを止めて、ネクタイを締めて、ブレザーを羽織る。最後通学バッグを肩にかけて登校準備が完了した。あ、腕時計もしておこう。

「先生絶対怒ってるよなあ……」

この先待ち受けているであろう先生による説教のことを考えると胃が痛くなってくる。

「……吐きそ」

ナーヴアスが止まらない。些細なことですら少しでもストレスを感じようものなら直ぐに胃が暴れ出してしまふ。

一旦深呼吸をして、大した物も入っていないくせに怒り狂う胃の中身を落ち着かせてから、玄関の扉を開いた。

「雨やほ」

雨降りの月曜日。憂鬱とした感情を吐き出すようについたため息は、その耳障りな雨音へと静かに溶けていった。



「失礼しました」

礼をして、職員室を出る。

学校に到着するやいなや即先生に見つかつた俺は案の定職員室へと引きずり込まれ、つい先程まで担任から説教を受けていた。

既に疲れがどつと溜まっている。学校つて来るだけでこんなにしんどいものか？普通。

「しっかし……」

まさか説教中にゲロを吐くとは思わなかつたな。先生ドン引きしてたぞ。

長つたらしい説教の最中に余計なこと、具体的にはニーゴのことを考えていたらつい溢れてきてしまったのだ。ごめんね職員室の床。

まあゲロと言つても、出てきてたのは朝に飲んだコーヒーと胃液だけの残りカスのような物だった。

さて、説教も終わり晴れて自由の身になった俺だが、教室に行くのが億劫すぎる。なんせ一週間も無断欠席したうえにクラスメイトからの着信、連絡をフル無視していたんだ。気まずいにも程があるだろう。

特に、俺と同じクラスに所属している幼なじみの男、天馬司には合わせる顔も無い。司は本人がそういう気質ということもあるのだろうが、俺のことを一番心配してくれていて、毎日朝昼晩と三度の連絡を欠かさず送ってきてくれていた。

連絡の内容も『何かあったのか?』とか『相談に乗るぞ』みたいな、俺のことを思ってくれているのだろうと分かる物ばかりだった。

そして今のところ、俺はそれを全部既読無視しているのだ。本当に合わせる顔がない。

「気まず過ぎる……」

廊下に立ち尽くしたまま動こうにも動けない。そんな状況がしばらく続いた。腕時計を見てみると、現在時刻は予鈴の数分前。予鈴が鳴るまでに教室に入らなければ遅刻判定になるのだが、ここまで来ておいて遅刻するのは流石にマズい。そろそろ覚悟を決めるのかなさそうだ。

勇気を出して一歩、足を踏み出そうとしたその時。向かいの階段を登ってくる生徒たちの隙間から垣間みえた見覚えのある金色の頭頂部。

司だ。久し振りに見たその目立つグラデーシヨンの髪色。思わず目が釘付けになってしまった。

「……………あ」

「愉太郎！」

ヤバイ。ずっと司のこゝろを見つめていたせいで彼と目があつてしまった。どのみち司には会うことになっていただろうが、少し待つてほしい。こゝろの準備が……………

そんな俺の内心だが、それが司に伝わるはずもなく彼はズンズンとこちらへ歩みを進めてきている。もう俺と司の距離は5mを切つているだろう。

「お前！一週間も音信不通で何をしていたんだ?!心配したんだぞっ！」

「っ、司……………」

怒っている。当たり前だ。俺はなんと云えばいいのかわからず、閉口してしまった。

「……………お前のことだ、理由もなく無断欠席などするはずがない。……………愉太郎、一体何があつた。教えてくれ。俺は、お前の力になりたい」

「っ……………」

そう言った司の表情はとても真剣で、とても頼もしく見えた。だからつい口を開い

て、全てを話してしまいそうになった。

……そんなの、駄目だ。ただでさえ心配を掛けさせてしまっているんだ。これ以上司に迷惑を掛けるようなことはしたくない。

「……………ごめん!」

「なっ!?! おい待て! 愉太郎!」

司に背を向けて一目散に駆け出す。司は俺が急に逃げ出したことで呆気にとられたのか、俺を追ってくるような素振りは見せない。

ごめん、司。でも、これ以上お前に迷惑掛けたくないんだ。だから、許してくれ。



走って走って、辿り着いた場所は屋上。ここならば誰もこないだろう。

雨が降っていて外に出られないのでその手前、入口の扉に腰を掛ける。

走っている最中に予鈴がなってしまったが、もういい。今更気にしてもしょうがない。

「やっちまったあ……………」

息を整えながら、先の行動を深く後悔する。また、逃げの一手をとってしまった。司

に事を話さないにしてももつとやり方があつたはずだ。それに……

「ハアアア……」

深くため息を付いて、思考をぼかす。これ以上うじうじ考えても切りがない。はいやめやめ。この話し終わり。

……扉越しでもうるさい雨音を背に、ブーツとしてみる。そういえばこんなこと、昔もあつたな。



回想するのは数ヶ月前の出来事。その日は瑞希と一緒に屋上へ出て特に目的もなくだらだらしていたのだが……

「いやあ、急に降ってきたね」

「しょっぱなからザアザア降りだったせいでめっちゃ濡れたな」

なんの前触れも降ってきた雨、しかも降り始めから土砂降りだったもんでビシヨビ

シヨ、とまではいかないが結構濡れてしまった。

俺と瑞希、そろって屋上の扉に背を預けて会話をする。

「風邪引かないように気をつけなきゃだねー」

「それな……ぶえつくしよい！」

「あはは、いった側からくしゃみしてるじゃん」

「体が冷えやすいんだよ、俺は。……にしても寒いな」

少しわざとらしく腕をさすってみると、瑞希がなにか悪い事を閃いた時の表情でこちらを見てくる。

「ふーん……じゃー！ボクが愉太郎のこと暖めてあげるよー！」

「えっ、ちよ……」

ギユツつと、瑞希が俺の脇腹に抱きついてきた。

ふんわりとした女の子らしい優しい香りが鼻腔をくすぐる。思わぬ不意打ちに少し、いやかなりドキツとしてしまった。

「ふふ、これならあつたかいでしょ？」

「いや、確かに暖かいけど……」

「愉太郎は、ボクにギユツつてされるの嫌？」

「うっ……まあ嫌ではないが……」

上目遣いで見つめてくる瑞希、嫌な訳がない。むしろウエルカムだけど……こんなこと言ったら奏たちに殺されるな。言わないでおこう。

「嫌じゃないなら、別にいーよね！」

「つたく、お前つて奴は……」

カラカラと笑う瑞希。とても幸せそうな顔だった。俺もそんな瑞希を見て、つい笑みが溢れた。

それから、少しの沈黙が訪れた。ただ、肩を寄せ合つてじつとしているだけ。それだけなのに、とても暖かかった。

数分たったあたりで、瑞希がゆっくりと口を開いた。

「ねえ、愉太郎」

「なんだ？」

「愉太郎はさ、ボクのことどう思ってる？」

「え？うーん……どう思ってる、か。難しいな」

「……もしかしてボクのこと嫌い？」

「ちつげーよ、なんでそうなる。瑞希のことは嫌いじゃないし、その……むしろ好きっていうか……」

恥じらいながらもそう言うと、瑞希は少しの間目を丸くして、その後悪戯な笑みを浮

かべた。

「……へえ、そっか、そっかそっかあ。愉太郎はボクのこと好きなんだあ?へえ〜」

「……たつた今嫌いになりそうだ」

「うわー!ごめんごめん!ちよつとふぎけただけじゃんかー!」

「ハハ、冗談に決まってるだろ。俺は、お前が、ニーゴの皆が俺を必要とする限り、俺も皆を必要とする。そういう人間だよ」

こてん、瑞希が俺の肩に頭を乗せてきた。もう今更どうこう言うつもりはない。

「そっか、そうだよな。愉太郎はそういう人だもんね。……ねえ、もう一つだけ、聞いてもいいかな?」

「ん、おう」

「愉太郎は、ずっとボクの味方で居てくれる?」

「は?何で今更そんなこと……瑞希は俺の大事な仲間なんだ。当たり前だろ」

「ホントに?どんなボクでも、受け入れてくれる?」

「……ああ、俺はどんな時でもお前の味方だ。今ここで約束してやってもいい。……」

だから、安心しろ」

「……ありがとう」

瑞希の俺を抱き締める腕の力が、少しだけ強くなった気がした。



今思い出しても、辛いだけだな。俺のことを必要としてくれていた瑞希は、ニーゴの皆は今となってはもう見る影もない。

「……雨止んでる」

思い出に耽っている間に雨が上がっていた。

……外、出てみるか。

扉を開いて、屋上に出る。

上を見上げると、視界に映るのは灰色だけ。

空はまだ、晴れていない。

お家デートってことで

カーテンの隙間から、太陽の光が木漏れ日のように差している。

「……朝か」

ぐぐぐつと、背筋を伸ばしてからベッドを降りる。

俺にしては割りといい感じなスッキリした寝覚めだ。

「……今何時だ？ あっ……」

ふと、今の時刻が気に掛かり、壁にかかっている丸い時計で現在時刻を確認した。

大きく息を吸って、吐く。

ベランダに出て空を見上げてみる。

「うん、いい天気」

今日はまふゆと二人で出掛ける予定が入っている。

ポカポカとした穏やかな気候と、主張控えめに優しく微笑む太陽。絶好のお出かけ日

和だ。

いやあ、天気予報だと曇りか雨の予報だったから心配したけど、晴れてよかった。う

んうん。

「そして現在時刻は……」

只今の時刻午前9時55分。

予定しているまふゆとの待ち合わせ時間は、午前10時。

うん、遅刻確定だね。

「黄昏れてる場合じゃねえ!」

ダアン!とペランダの窓を叩きつける様に閉め、爆速で私服に着換える。

「飯は……いらね!」

朝食を取ってる暇なんてあるはずがない。

歯を磨いて適当に洗顔を済ませて、鏡でビジュアルのコンディションを確認する。

俺だつて一応見た目に気を使うお年頃だ。

「寝癖無し!前髪良し!財布持った!準備完了!」

洗面所を後にして玄関に直行し、靴を履いて、そのまま玄関扉を開いた。

えーと、今多分ちようど10時くらいだろ?ここから待ち合わせ場所の駅まで走れば

15分くら——

え?

「……おはよう」

「……なんでここに居るんだ」

扉を開くとそこには何故か、駅で待ち合わせを予定していたはずの少女、朝比奈まふゆが待ち構えていた。

「……愉太郎が寝坊してたから、駅で待つより迎えに行ったほうが早いと思った」

「なるほどなあ……俺が遅刻しそうなを見かねて………いやおかしいだろ。なんで俺が寝坊したこと知ってんだよ」

「……前、愉太郎の家に行ったとき、部屋にカメラ仕掛けてたから」

「はい？」

まふゆの口から告げられた衝撃の事実。流石に動揺が隠せない。

「そんなの知らないんだが……？ え、確認も取らずになんつーことやってんの？」

「？ ……奏達には確認したよ？」

「俺にだよ！家主の俺に聞かずに誰に聞くんじゃ！」

「……よくわからない」

「それで逃げれると思うなよ!？」

「……そもそも、愉太郎が寝坊したのが悪い」

「いきなりぐうの音も出せねえこと言うじゃん」

正論という名の拳にぶん殴られた。仰るとおりです、まふゆさん。

「オーケー分かった、ならこうしよう。まふゆが………というかまふゆたちが勝手に俺

の部屋にカメラを仕掛けたことについては何も言わない。その代わりに、まふゆは俺が今日寝坊したことを許す。これでどうだ？」

「……別に、寝坊したことには怒ってない」

素つ気なくそう言ったまふゆの表情は、本当になんとも思っていないようで、思わず口をつぐんでしまった。

「ぐ……と、とにかく！隠しカメラの件は不問にするから！今後はこういうこと無いようにしろよ！」

「……」

「ちよおいちよいちよいちよい！」

恥ずかしくて早口で言い切った俺には目もくれず、まふゆは勝手に俺の家の中へと足を踏み入れていたもんだから、咄嗟に普段の俺からは想像出来ないような妙ちきりんな声を出してしまった。

「……今日は外で遊ぶ予定だろ？それなのになんで家ん中入ってんだよ」

「……気が変わった。今日は、愉太郎の家に居たい」

靴を脱いで既に式台へまで上がったところでもまふゆが振り返ってそう言った。俺は思わず目を見開き、声を失った。

それから数秒後、急ににフリーズした俺を不思議そうに見つめながら小首を傾げるま

ふゆを見て我に返った……という少し大袈裟だが、ハツつとして口を開いた。

「気が変わったってお前……へえ……まふゆも前と比べりや、大分自分の意志を持つようになつたな」

「……そうなの？」

「そうだよ。昔のお前は何を聞いてもヨクワカンナイ、とか言つてき、そいつが今になつちやあ、キガカワツタノ、キヨウハオウチデごふあ!？」

我ながら気色の悪いファルセットボイスでまふゆの物真似を試みたら鳩尾にいい感じのが一発。まふゆの右肘だ。

両膝について攻撃された腹部を腕で抑える。

「なんで……」とまふゆに聞くと「……よくわからない。けど、やらなきやいけないと思つた」と返された。

「それが怒りの感情だ……忘れるんじゃないぞ……」

「……これが、怒り……」

拳を開いて閉じる。それを繰り返すまふゆ。その様はまるで、バトル漫画の敵キャラが真なる力に目覚め、覚醒したシーンのようだ。

「……まふゆって案外ノリいいよな」

「……よくわからない」



結局お出かけは中止になり、その代わりに俺の家でまふゆと一日を過ごすことになった。

ぐう、と腹がなった。そうか、もう腹時計がウオームアップを始める時間か。

なにか、なにか昼飯を作りたい。まふゆも居るから二人分、作りたい。作りたいんだ。だから……

「そろそろ身動きが取りたいです……」

「ダメ」

「即答ですかい……」

一時間前、いつの間にか背後へと忍び寄っていたまふゆに気付かなかった俺は、死角から襲われ抱き着かれあれよあれよという間にガツチリホールドされてしまった。

そこでそのまま一時間が経ち、現在に至る。

「やっぱ離し……痛い痛い痛い！ちよ！弓道部やばい！力強い！分かった！そのままでもいい！そのまんまでいいから！」

情けなくも、加減してくれえ……と声を絞り出すと、俺の体を締め付けるまふゆの腕

の力が緩んだ。

荒ぶる呼吸を整える。死ぬかと思った……

肋がマジで死にかけてたが死んでないのでよしとしよう。

「なあまふゆ」

「……なに？」

「腹、減っていないか？」

「べつに」

「そうか……」

まふゆに「お腹すいた」の一言を引き出させ、料理をする口実にしようとするがあえなく撃沈。絶対要塞まふゆの壁は分厚かったか……

「……お腹が空いてるなら、ご飯を作ればいいのに」

「いやそうだけど、お前が離してくれねえから料理しようにも出来ねえんだよ」

「? ……このままでも料理は出来るでしょ？」

「え？」

え？



フライパンに載せられた食材たちがジュウジュウと焼かれる音を聞きながら、額から頬を伝ってきた汗を拭う。

台所に立ち、お玉を使ってフライパンの上の食材たちを踊らせながら考える。身体に熱が籠もっている気がするのは何故？火を使っているからだろうか？

……いいや違う。

俺がやたらと汗を掻く理由はきつと、まふゆが俺の背中から腕を回し、先程肘をかました鳩尾のすぐ下、中腹部の辺りでその腕を結んでいるからだと思う。

まあつまり、立った状態でまふゆに後ろから抱き着かれて俺の心臓が馬鹿みたいに高鳴っているってことだ。

「なあまふゆ」

「……なに？」

「これ、暑くないか？」

「……べつに」

「そうか……」

まふゆに抱き着かれること自体に抵抗はないしもはや慣れているまでである。だがしかし、それは座っている状態のときに限る。立ったまま抱き着かれるというシチュエー

シヨンは初なのだ。

人という生き物は基本的に、初めてのことに直面すると心配だとか不安だとかのネガティブな感情に苛まれるように出来ている。心とはそういう仕組みなのだ。だからこうして俺の心臓がバツクバクなこと何らおかしいことではない。

え？お前のそれはネガティブな感情じゃないだらって？

だ ま れ

とにかく俺は慣れないことにはとことん耐性がない。この状況はやばい。まじでやばい。何がとは言わんが当たってる。耐えろマジで耐えろ理性頼む。

「……心臓の音、うるさいね」

「わ、悪いかよ」

「……べつに……あと、なんか焦げ臭い」

「え？ ア、ッ!?めっちゃ焦げてる!?!」

待って！俺の炒飯が死んじやう！ヤバイくらい焦げてる！ダークマターみたいに
なってる！というかダークマター！



「ん、案外行けるわ」

暗黒物質と化した炒飯を頬張り、そう呟いた。

見た目はアカンけど普通に食える。うまうま。

机に肘を付きながら炒飯を食う俺。

行儀が悪いっいたらありやしないが、問題ない。何故ならここは俺のテリトリー、何を

しようが俺の勝手だ。

「……愉太郎、ほっぺにご飯粒ついてる」

「まじ？とつてー」

「……もう」

「サンキュー」

まふゆは呆れながらも俺の口元についた米粒を指先で取ってくた。呆れながらとはいつたが、まふゆの表情にそのような感情が浮かんでいるわけではない。まふゆの感情は大体フィードリングで読み取れるっただけだ。

「まふゆも食うか？結構美味いぞ」

「……食べる」

「はいよ……ほれ、あーん」

炒飯をよそったレンゲをまふゆの口に突っ込む。

まふゆはモソモソと炒飯を咀嚼し、飲み込んでから口を開いた。

「……おいしい……と思う」

「ハハ、そりゃあよかった。……にしても、まふゆは本当に感情豊かになったな。昔、お前に俺の料理食わせた時はよくわからないの一言で済ませられたからな。なんつーか、感慨深いわ」

「……そうかな」

「そうだよ」

「これさつきも言った気がするな。まあいいか。」

「……愉太郎がそう言うなら、きつとそうなんだと思う」

「その、俺がそうなら私もそう理論は昔っから変わんねーな」

「……だって、愉太郎なら間違えないでしょ？」

「……そんなことねーと思うけどなあ。俺だって人間、17年もやってんだ。振り返ってみりゃ間違いだらけだよ」

「……そう、なんだ」

「おう。……まあでも、お前達と出会ったことは間違いじゃなかったっーのは、確かに言えるな」

「……なにそれ」

「俺もよく分からん」

「……………ふふつ、へんなの」

無表情を崩したまふゆのその微笑みは多分、心の底からのものだと思う。



「ふがつ……………ん、おお」

屋上に出てボケーっとしていたらしいの間にか、寝てしまっていたらしい。腕時計を確認すると、時刻は1時を回っている。

「首痛……………」

痛む首をさすりながら身体を起こす。寝違えた。痛い。

……………全く以て、幸せな時間悪夢だった。あんなの、今見せられても辛いだけじゃないか。

ああもう、最悪の寝覚めだ。今日二回目だよ。

「早退するか」

家帰ってもつかい寝たい。

暴力系ヒロインは時代錯誤

——数ヶ月前、ナイトコードにて

時刻は深夜の4時を回っている。もはや朝。

K、雪、Amiaの三人は今日の作業を完了させ既に落ちていて、ボイスチャットにいるのは俺とえななんだけ。

そして俺も作業自体は終わっていたので、作業をしているのはえななん一人だけだった。

特に会話らしい会話もなく、俺はえななんに画面共有してもらい、彼女の作業風景を頬杖付きながら眺めていた。正直クソ眠い。

『私、本当にここに居てもいいのかな』

静寂を破るはえななんの不穏な呟き。いきなりヘビーなのが飛んできたおかげで一気に眠気が覚めた。

「どうした急に」

『え、嘘ミュート出来てない？』

「おう、バッチリ聞こえてたぞ」

『……最悪』

「まあ、俺しかいないんだからその分良かったと思えよ」

『確かに。K達に聞かれてないだけまだマシね』

もしも彼女らに今の発言が聞かれていたら、それはもう即セカイに招集（強制）されてニーゴサミット開催コース確定だろう。

「で、もう一度聞くが急にどうしたんだ？」

『何でもないわよ』

「流石に嘘だろ」

『別に、いつも思ってることがつい口からこぼれただけよ』

……大方、エゴサにアンチでも引つ掛かったのだろう。えななんは繊細な子だからな。ちよつとしたアンチヘイトでもかなり傷付くというか、気にしちゃうタイプなんだよな。

「……えななんにはここに居てもらわないと困る。お前が居ないニーゴなんてそれともうニーゴじゃないし、寂しいから嫌だぞ」

なんか結構恥ずかしいことを言った気がする。ほつぺたがちよつと熱い。

『……アンタなら、やっぱりそう言ってくれるわよね。ほんとに、優しい人……』

「え、おう」

貴重なデレえななん……急に出されると心臓に悪い。ドキドキしちゃうぞ。

……でもやつぱり、思うの。私はニーゴの作るMVに相應しいイラストを描けてないんじゃないかって。私と皆じゃ釣り合っていないんだって』

「めんどくせー女だな」

『なっ、面っ……私本気で悩んでるんですけど！……その、面倒くさいこと言ってる自覚はあるんだけど……』

自覚あんのかよ……でも女の子はちよつと重いくらいが可愛いって言うし……え？
言わない？俺の好みに合ってるからいいんだよ。

「まあなんだ、一番重要なのはお前がどうしたいかだろ」

『私がどうしたいか……？』

「お前はニーゴのイラストをこのまま描いていたいのか、もう描きたくもないのか、どっちなんだ？」

『それは勿論、この先も描いていたいわよ』

「じゃあいいじゃん。えななんが描きたい言うのなら、ここに居ちやいけない理由なんてないだろ」

『でも……』

「お前以外にやニーゴのイラスト担当は務まんねえんだ。代わりも居ない。お前じゃな

きやダメなんだよ、えななん』

『……』

「俺はお前の絵が好きだ。……お前が絵を描くつて言う限り、俺はずつとお前の隣に居てやる。それでお前の描く絵が完成したら、これでもかかってくらいに寝め倒してやる。お前の顔が茹でだこみたいに真っ赤になるくらいにな。……だからさ、描けよ」

「面倒くさいこと言う女には、それよりも重い感情をぶつけてやるのがマスト。あ、勿論本心をぶつけるんだぞ。嘘言ってもどーせすぐバレる。」

『……ほんつと、よくもまあペラペラと齒の浮くようなセリフを言えるわね』

「本当のこと言ってるだけだからな」

『……本当にずつと隣に居てくれる?』

「無論」

『……そ』

◆ この後、絵名が「言質はとった」とか言いだして部屋に監禁しようとしてきた時は、流石に身の危険を感じたことをここに記す。

空一面の曇が蠢く昼下り。

学校を早退してきた。少し、いや大分早いが帰路につく。朝も思ったが今日はよく冷えるな。吐く息が白い。

「さむ……」

わざとらしく腕を擦ってみる。しかし、それに反応する者は誰も居ない。まあ一人でいるから当たり前なのだが、なんか虚しいな。

家に帰るべくシブヤの街をのそのそと歩くこと約十分くらい。唐突に腹が鳴った。そういえばまだ、昼飯を食っていなかったな。

「腹減った……」

大した量も食えないくせに、いつちよ前に悲鳴を上げる俺の胃袋。人体にこんな機能要らないだろ。

しかし、んなこと言っても腹は空く。空くもんは空くのだ。こればつかしはしようがない。

「コンビニいくか」



「あつしたー」

コンビニ定員のもはや日本語にすらなっていない気の抜けた挨拶を背に、右手に袋を引つ提げながらコンビニを出る。

「ふっ、昼飯ゲットだぜ。……はあ」

何がゲットだぜだよ。ポケモ○マスターみたいに言うな。

……昔はこういうしょーもない一人ポケくらい鼻で笑えていたのにな。今日は普通にマジレスしちやつたよ。……え、自分のポケにマジレスって悲し過ぎない？

袋に手を突っ込んで昼飯の栄養バーを取り出す。こちらの栄養バーなんと、税込み価格108円。わお、とつてもリーズナブル。

包装袋を開き、バーを半分くらいに折ってポイと口の中に放り込む。

「……？ 味がしねえ」

しやりしやりした食感と口の中の水分が持つてかれる感覚しかない栄養バーとか誰得だよ。全く味しないけどこれ何味だ？

……え？チョコフレバー？マジで？全然チョコの味しねー。

「美味しくない……」

そう文句を垂れつつも、食いもんを粗末にするのは良くないのでしっかり全部食い切った。

ほんとに美味しくない。だが不味くもない。変な感じだ。

まあ腹ごしらえは出来たし、よしとしようか。

ゴミを捨てて、再び家に帰るべく歩き出す。

今日は、家に帰って、寝たい……寝る。



家に帰って寝ると言ったな。あれ嘘だ。

「うわ、結構広い」

ぐるりと辺りを見回し、そう呟いた。

俺は今、とある美術館へと足を運んでいた。

事の経緯を説明しよう。

家に向かっている道中、結構デカイ美術館の看板が目に残った。

看板には有名な画家の美術展を期間限定で開催しているという内容が書かれていたのだが、その有名な画家というのが、ウチのイラストを担当している絵名がよく尊敬しているあの参考になっているあの言っていた……つまり彼女お気に入り画家だったの

だ。

あ、絵名が好きなアーティストじゃん。

そんなことを考えながらぬぼーってしてたら、気づかぬうちに美術館の方へと足が勝手に動いていた。無意識で体が動くってやばくない……？やばいよね。

「この絵見たことあるな」

展示コーナーに入っただけ、真正面にデカデカと絵画が飾られている。絵に詳しくない俺でも見たことあるくらいなんだ、恐らくこの画家の代表的なやつだろう。

「これは……見たことない。これ……も見たことない」

この画家、世界的に有名ないいけど全然知らない作品ばっかだな。……ここまで何も知らない、特に専門分野ではないことだとしてもいかに自分が無知なのかを思い知らされるな。

取り敢えず、この展示スペース一周してみるか。

そう思い、絵画から視線を外し向かい側の壁の方を向いて歩き出そうとしたその時、俺の視界に、展示された作品を熱心に見つめる一人の少女が入り込んだ。

見覚えのある少女だった。

「絵名……？」

思わず声に出して名前を呼んでしまった。

……待て、なんでここに居るんだ。だって今は平日の午前……ああそうか、絵名は定時制の高校に通っているんだったな。納得納得……いや納得してる場合じゃないな。

これめっちゃ気まずいな……どうしよ。

自分の名前を呼ばれた絵名、彼女はその声の出処を探るように周囲を見渡し、最終的に俺と目があった。

……なんだよその目、人間を見る目じゃねえだろ。俺、そんな目で見られるようなことしたか？

俺と目があったままの絵名がカツカツと俺の方へと歩みを進め来る。

心做しか一歩ずつ歩くスピードが早くなってきている気がする。

絵名と俺の距離が手を結べるくらいに近付いた辺りで俺は勇気を振り絞り、震える口を無理矢理開いた。

「よ、よお……絵名、久し振——」

パシン！

乾いた音が突き抜けるように響いた。

「いつ……」

急に襲って来た痛みに思わず頬を抑えた。

一瞬、思考が停止した。

あるのは、確かな頬の痛みのみ。
数秒後、遅れてやって来た理解。

なるほど、俺は今、絵名に平手打ちをされたのか。

絵名の表情には分かりやすく怒りの感情が浮かんでいる。

「馴れ馴れしく名前呼ぶな……このクズ……!」

絵名は放心する俺をキツと睨み付け、そう吐き捨ててスタスタと去って行ってしまった。

「……マジで?」

呆けツラの俺の眩きは、絵名が退出し俺一人となった展示スペースへと、虚しく消え入った。

急展開過ぎてちよつとついていけないかな……

「……このトイレって確か2階だよな」

マジ無理……ゲロ吐きそ……てか吐く……。

番外 I F : 暁山瑞希の後悔

——とある日の神山高校

太陽が激しく地を照らす炎天下、目先のコンクリートがボヤケて見える。

暁山瑞希はその日、入学して以来サボリ気味だった高校に珍しく朝から登校していた。

時々、瑞希はこうして高校に顔を出すのだが、そのことにこれといった理由は無い。彼女は気分屋なのだ。

しかし、今日は違う。瑞希は今日、明確な目的を持ってこの場へ足を運んでいた。

「愉太郎……」

その目的は一つ、瑞希の想い人である男、曇 愉太郎に会って話すことだ。

瑞希にとって愉太郎は、性別のことで悩む自分を否定せずに、ありのまま姿を受け入れてくれる、正に救世主のような人物だった。

瑞希が愉太郎に好意的な態度を見せれば、彼も多少なりとも好意的な返しをしてくれる。

その様を待ちゆく人々が見ればきつとだれもが、ああ、きつとこの二人は付き合っ

るのだな。爆発しろクソツタレが。といった感じでカッブルに見紛うことだろう。

願わくば、この先もずっと、彼の側に居たい。側に居てほしい。

そう思っていた。

好き。大好き。ずっと信じてる。ずっと側に居て。

しかし、そんな愛情はとある日、一夜にして憎悪の感情へと豹変した。

大好きだったはずの彼に抱くのは、どうしようも無い程の嫌悪感。

嫌い。大嫌い。気持ち悪い。お前なんか消えてしまえばいい。

名前を口に出すだけで吐き気を催し、逆に名前を呼ばれたのならば、これ以上にならない鳥肌が立つ。

前に自分のことをおとこおんなだとか言って、差別してきた奴らなんかとは比にならないくらいに憎かった。憎くて憎くて、しょうがなかった。

だから、とにかく遠い所に行ってほしくて、心無い言葉の数々を投げかけた。

キモい、不快、消えろ、大嫌い。

思いの限りに負の感情を彼にぶつけた。

愉太郎は、そんないきなりの出来事に戸惑いを隠せていない様子だった。

瑞希は傷付いていく愉太郎を見て、いい気味だとほくそ笑んでいた。

そうしてしばらくがたった日、愉太郎はニーゴを脱退した。

彼は最後に頭を下げて感謝の言葉を述べていたが、瑞希にはそれがとても腹立たしく思えて、「あーもうー！さっさと消えてよー」と彼に言い放った。

愉太郎はどこか悟ったような顔で瑞希の糾弾を聞き流し、その場を去っていった。

瑞希含む二ーゴのメンバーはこのことに対して、ようやく邪魔者が居なくなってくれと喜んだ。数日後、その自らの行いを心の底から後悔することになるとも知らずに。

全てが戻った。突然のことだった。

大好きな彼にたくさん酷いことを言ってしまった。

取り返しのつかないことをしてしまった。

後悔の念で胸が押し潰されそうになった。

瑞希は直ぐに愉太郎のいる場所へと向かい、開口一番で謝罪をした。

酷いこと言ってごめんなさい。あんなこと本当は思っていなかった。

瑞希の謝罪を聞いた愉太郎は、少し驚いたような顔をした後、かすかに微笑み、口を開いた。

「そうか……じゃあ、まあ許す。……もう、いいよ」

彼は瑞希を許した。しかし、彼の言葉はどこか素っ気なく、心が籠もっていないよう

に瑞希は感じた。

それ以来、瑞希は愉太郎と会っていない。

許してはもらったが、心の中にあるモヤモヤが晴れない。とても、もどかしかった。その心の霧を晴らすために、瑞希は今日この場に居る。

靴を上履きに履き替えて廊下を歩く。

本当は今すぐにでも愉太郎に会いに行きたいのだがやはりまだ、瑞希にはどこか気ま
ずさがある。

(本当にボクは愉太郎に会ってもいいのかな……う?)

愉太郎を傷付けた自分には彼に会う権利などないのではないかと、瑞希はそう思っ
ていた。

自分の教室に入って席につくと、それに気がついた近くに居た同級生の女子が瑞希に
声を掛けた。

「あれ? 暁山さん今日来てるんだ。おはよう」

「……」

「あれ? おーい。暁山さーん? 聞こえてる?」

「うえっ!? あ、ごめんね、ちよつと考え事してた……おはよー」

瑞希は同級生からの挨拶にも気付かない程に悩んでいた。

(愉太郎に会いたいな……でも……)

「……あ、チャイム鳴っちゃった」

瑞希が机に突っ伏してウンウンと唸っている間に朝の予鈴が鳴った。

(……取り敢えず、授業受けながら考えようかな)



昼休みの時刻になったが、瑞希はまだ愉太郎と会う決断が出来ずに居た。

「うーん……」

未だに首を傾げて考え込んでいる瑞希。すると次の瞬間、瑞希のお腹が可愛らしい鳴き声を上げた。

「……お腹へっちゃった」

(食堂いこーつと)

瑞希は席を立ち上がり、教室を後にする。目指す場所は、食堂。

(今日は何食べよっかなー?)

今日食べる昼食に思いを馳せながら廊下を進んでいく瑞希。お昼ごはんのことを考

えると少しだけ前向きな気持ちになった。

軽い足取りで食堂へ向かう瑞希。しかし、次の角を曲がった所で、瑞希の足はピタリと止まってしまった。

角を曲がった15mくらい先から愉太郎と彼の

同級生が歩いてくるのが見える。まさかのタイミングでバツティングだ。

「あつ……愉太郎……」

「ん？ おお、瑞希じゃん。今日は学校来てんのな」

「え、あ、うん。ちよつと気が向いて……みたいな？」

（嘘だけどね！ 本当は愉太郎に会いたかったから来ただけなんだよね！）

「はは、瑞希らしいな。今から食堂か？」

「うん……ま、そー言う感じかな」

「そうか、じゃあ急がないとだな、昼休みみじけーし。引き止めて悪かった。またな」

「ううん！ 全然大丈夫だよ……って、行っちゃった」

去っていく愉太郎達を尻目に、瑞希はため息を一つついてから、また食堂へと向かって歩き出す。

（愉太郎と会って、話すことは出来た。けど……）

明らかに以前とは対応の距離感が違った。言葉として形容するのはとても難しいが、瑞希と愉太郎の間に、一枚の大きな壁が出来てしまったみたいだった。

(……そつか……もう前みたいに接することは出来ないんだな……)

彼の隣りに座って、彼と軽口を叩き合って、笑い合う。そんな幸せな時間も、もう二度と訪れることはない。

そう考えると、胸がギュツと締め付けられた。

涙が零れそうになる。

ふと後ろを振り返ると、愉太郎達は角を曲がらずに壁に背中を預けて、楽しそうに駄弁っていた。

頭を左右に振り。目尻に溜まった涙を飛ばす。

(……でも、しょうがないよね。ボクは、絶対に許されちゃいけないことをしたんだから。今こうして、愉太郎が幸せそうに笑ってくれているだけで、十分だよ)

瑞希は談笑する愉太郎を遠巻きに眺めながらそう自分を納得させた。

「今日暑いな。ちよつとうえ脱ぐわ」

「もう夏が顔出してきてるよな。早くね?」

「それな」

彼らはとても楽しげだが、遠くにいるため何を話しているのかが分からない。

(ボクも気持ち切り替えなきゃなあ)

そう思い、食堂へ向かうため元の方向を向こうとしたその瞬間、愉太郎がおもむろに制服のブレザーを脱ぎ始めた。

途端に瑞希は、何故か愉太郎から目が離せなくなってしまった。

嫌な予感がする。冷汗が瑞希の頬を伝った。

何か分からないけど、とても不安で、凄く怖い。

今のうちにあの男を視界から外せと脳が警鐘を鳴らしている。

しかし、どうしても彼から目が離せない。

そうしている内に愉太郎はブレザーを脱ぎ終え、上に着ている服が半袖のシャツだけになった。

半袖になったことで露出した愉太郎の腕、瑞希の視線は吸われるように彼の左手首へ、そして、それを見た瑞希は自分の目を疑った。

「……ウソ」

横一線に走る何本もの切り傷。それはまるで、リストカットの跡のようだった。否、瑞希から見た見たそれは、間違いなくリストカットの跡だった。

(なんで……なんでなんでなんでなんでなんでなんで)

頭が真っ白になった。視界が真っ暗になった。

「うわ、なにその傷」

「うわって言うな。猫にやられた」

「あー、お前最近猫飼いだめたって言ってたもんな」

「あの畜生まつつじで言うこと聞かねえ」

「畜生で、猫なんてそんなもんだろ」

「まーそうだけどさあ」

手首の傷を隠そうとする素振りもなく、和気あいあいとした雰囲気崩さないまま会話を続ける愉太郎を見て、瑞希はようやくよく理解した。

愉太郎の心は、既に壊れている。

ご機嫌そうに笑っていた彼はもう、正気でない。自分の異常性に気が付け無い程に気が狂いしてしまっている。

愉太郎と一緒に居ることができなくても、彼が幸せならそれでいい。そう思っていた。

しかし、その自分勝手な願いはたった今、この瞬間に打ち砕かれた。全てが手遅れだったのだ。

「いぬ……なま……」

治まらない動悸、震える呼吸、鉛のように重くなっていた口から絞りでた声にならない声。

彼女の言葉が彼に届くことはもう、決してない。

その香水のせいだよ

美術館で絵名にビンタされてゲロ吐いた後、無事家に帰着した。ゲロ吐いてる時点で無事じゃないだろうっていうツツコミは受け付けない。

「……………ただいま」

ここは誰も居ない消灯されたワンルーム、当然俺の声に返事が返ってくることもない。

床へ鞆とブレザーを無造作に投げ捨て、ネクタイを解く。

「疲れた……………」

ベッドに腰を掛け、そのまま仰向けに寝っ転がって大きくため息を一つ。

絵名に打たれた右頬を指先で撫でると、ピリツとした痛みが走り思わず顔を歪めた。

絵名のやつ、本気ビンタしやがってよ……………やーい！えななんの陰険自撮り女〜！

「……………はあ」

何も考えたくない。

もう寝る……………前に風呂入るか。

「香水くっせえ」

学校の職員室で拾ってきたのだろうか、シャツと身体からキツめの香水の香りが漂っている。

香水の匂いは苦手だ。あの鼻の奥がツンとする感じ、気持ちが悪い。

あと、女物の香水の匂いが俺に付いてると奏がキレる。

……ああでも、そのことは今なら気にする必要ないか。

ほんつと、未だに信じられねえな。あの、奏があそこまで俺を拒絶するなんてなあ。

やべ、泣きそう。思い出したくもねえのに思い出しちまう。



底冷えした冬のある日、時刻は午前の2時を回っていたと思う。ナイトコードにメンテナンスが入っていたので、その日はニーゴでの活動は無しということになった。

今日はやることも特にないので早く寝ようと思っていた。

しかし……

「寝れねー」

ごあいにく様、深夜まで起きて作業するのが習慣として板についていたせいで、全く眠れない夜を過ごしている。

そんな時だった。この閑散としたワンルームに一つの音、ピンポン、という呼び鈴の音が響いたのは。

「ああ？ピンポン？この時間に？」

重ねて言うが、現在時刻は既に午前中の2時を回っている。良い子の皆ならばこそぞって寝ている時間帯だ。

こんな夜更けに、誰が呼び鈴を鳴らしたのか検討も付かない。

「いまいきまますよー……」

眠れないとは分かっていつつも、一応入っていたベットから身を離し、部屋と廊下の電気を付ける。

なんか怖いので足音を立てないように玄関へ向かい、今のご時世には少し古いかもしれないドアスコープを、恐る恐る覗き込んだ。

「……奏？」

ドアスコープを覗いた俺の目に映し出されたのは一人の少女。

紺のジャージにホットパンツ、下半身まで伸びたシルバーアッシュの髪がとても特徴的だ。

多分違っているということは無いだろうが、一応確認しておこう。

「奏か？」

「あつ、愉快だ。よかった、やっぱりまだ起きてたんだ……うん、私だよ」
やはり奏だった。正直ホツとした。

よし、ならば何も警戒する必要は無いな。

「今開ける」

「う、うん」

玄関を開くとそこには奏が、どこか落ち着かないソワソワとした様子で佇んでいた。

「よう奏、なんかあったか」

「こんな遅い時間にごめん、愉快だ。その、ちよつとお願いしたいことがあって……いい、かな？」

「お願い？そりやあもちのろんでオツケイよ。言ってみろ」

「ありがとう。……えつと、今日はニーゴでの活動が無くて、曲作りにもちよつと行き詰まってるし、いい機会だったから少し前に借りたホラー映画のDVDを見たんだ。……何か曲を作る手掛かりが見つかるかもしれない、って思つて」

「あー……うん、まあ、続けてくれ」

もうこの時点でなんとなく何を願ひされるのか分かつてしまつたが、一応聞こう。

「それで、そのホラー映画を見たのはいいんだけど……その、恥ずかしい話、映画が思つてたよりすごく怖くて……一人で居るのが怖くなつちやつて……それで……」

「分かった、もういい。事情は把握したから取り敢えず上がれ」

「いい、いいの?……やった」

小さくガッツポーズを決める奏。寒いから早く入ってほしいんだが。

「じゃあ、お邪魔するね」

「おう、ていうかお前、その格好じゃ外寒かっただろ」

そう言つて冷たい外気に触れていたせいで少し赤くなつた奏の手を取り、そのまま優しく握る。

「うわ冷つた。風邪引くなよー?」

「……愉太郎の手は、暖かいね」

「そりゃあさつきまで暖房効いた部屋に居たからな。ほれ、さつきと部屋入ろうぜ」

「うん……」

部屋に戻ると、扉を開けっ放しにしていたからか部屋全体の温度が少し下がっている気がした。

「なんか飲み物でもだそうか? もちろん温かいやつな。俺はコーヒー飲むけど、なんか飲みたいのあるか?」

「あ、じゃあ私もコーヒー」

「あいよ。その辺座つてまっつけ」

「うん、ありがとう」

水道水の入ったやかんを火に掛ける。普段は電気ポットを使っているのだが、つい最近そいつがぶつ壊れたので、今日はガスコンロとやかんを使って湯を沸かしている。このガスコンロとやかんの組み合わせ、ちよつと平成っぽさを感じれてエモい。エモいつてなんだ？

「なあ奏、エモいつてどういう意味だと思う」

「エモい？うーん……ごめん、私もよく分からない。アップしたMVのコメント欄にエモいつて書かれてるのは偶に見るけど、どういうニュアンスで使ってるんだろうね」

「んー、やっぱ皆意味理解せずにフイーリングで使ってたりするのかなあ」

「そうかもね。なんとなくの感覚で使ってる言葉って、結構多いよね」

ガスコンロに灯ったゆらゆらと揺れる火をじつと見つめながら、奏には背を向けた状態で、そんな他愛もない会話を交わす。

「……ねえ」

何の前触れもなく、奏の声がワントーン下がった。

え、なに？今から説教でもされる？なんで？

「……どうした」

「ちよつとこつち来て」

「え、いやでも今火い見てる……」

「いいから」

「ちよ、引つ張んな——どわっ」

奏にいきなり腕を掴まれたと思つたら、そのままベッドへと押し倒されてしまった。

俺の両手首をガツシリ掴んだまま離さず、マウントポジションを取る奏。その細身な身体からは想像出来ない力強さでベッドに押し込められてしまっている。

「か、奏……?」

「……」

「くすぐった……んう」

奏が体勢はそのまま俺の鎖骨辺りに顔を近づけ、そこから首筋に掛けてスンスンと匂いを嗅いでいく。くすぐりたい……

「……やっぱり」

「やっぱりなんですか?もしかして臭う?もしそうなら泣いちゃうけど。」

「知らない女の臭いがする」

「え」

「香水の香り……瑞希と絵名はこんな匂いがキツイのはつけないし、まふゆはそもそも香水自体を使わない。じゃあ、この匂いはどこから拾って来たの?答えて」

ギリ……と奏が俺の返答を急かすように俺の手首を掴む力を強める。

ちよつと痛いかな……ウソめつちや痛い。いや力強すぎ……？

痛みで鈍つた思考で考える。

香水の香りが身体につくようなこと、なにか心当たり……あ、あるわ。

「あー、多分あれだ。今日来た税理士の人になすりつけられたんだと思う」

「税理士？」

「おう」

そう、税理士である。最近、ニーゴでの活動で得れる収益がバカに出来ないレベルの値段になってきて、確定申告とか色々面倒なことを頼もうと思ひ税理士を呼んだのだが、その呼んだ税理士の女性の付けていた香水がかなりキツいやつだったのだ。

「別に、女作つて家に連れ込んだとかそういうわけじゃないからな」

「本当に？」

「俺が今までお前に嘘を付いたことがあるか？」

「13回」

「なんで回数まで覚えてんだよ」

「しかも結構な数嘘言ってるし。」

「だがまあ、今回に限っては絶対に嘘じゃないと誓えるぞ」

「今回に限らず誓つてよ」

「それはあ……後ろ向きに検討させて——いだだだ！ごめん！ごめんて！分かった！誓う！誓うから！手首もげちやう！」

ちよつとふざけたら手首からギチギチという音が聞こえるくらいに奏の力が強まった。マジごめん。

「……肩出して」

「肩？なんで？」

「いいから」

「はい……」

超ヤバイ表情で凄まれたので、ここは大人しくしたがっておこう。襟ぐりを手で引つ張り、右肩を露出させた。結構恥ずい。

「これ恥ずかしいんだが……何するつもりだ……う？」

「いただきます」

「え？……いつ!？」

かぶり、いやこれはかぶり。奏が俺の右肩へと噛み付いてきた。

「ちよ、奏さん!？」

「ふがふが」

痛い。跡残りそうなレベルでガジガジされてる。あとふがふがすんな。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでしたじゃねえよ」

「あうっ」

俺の右肩から口を離れた奏、すかさずチョップを決める。

ありやりや、肩に歯の跡付いちやったよ。血出てるし。

「なんで急に噛み付いてきた」

「えっと、マーキング……しなきゃって思ってた」

「マーキングで……」

あら、独占欲が強い子なのね……でも、もうちよい優しいやり方あったよね……

「ごめん。痛かったよね」

「そりやあもう」

「だから、私にもしていいよ?」

「おう。おう?」

何故そうなった。いやそうはならんやろ。なつとるやろがい!

そして顔を赤らめながらインナーを引っ張るの辞めなさい。すぐくエツチだから。

「いいのか?」

「う、うん。……一思いにやっちゃって」

「いや、やらねえけど」

「えっ……」

当たり前じゃん。そんなことしたら俺捕まっちゃうよ？

……なんでそんな残念そうな顔するんだよ。辞めろよ、ちよつと揺らいじやうだろ。

「やるわけねーだろ。お前に傷付けるとか絶対無理。罪悪感で死んじやう」

「……優しいんだね」

「それ絵名にも言われたわ」

「なんで他の女の名前出すの？」

「ごめん……」

何が地雷なのか分からない……！

「あ、ていうかお湯、そろそろ湧いたと思うんだけど」

ふと思いつ出した。いまお湯沸かしてる途中だったわ。

「そうだね」

「おう、だから退いてもらってもいいか？」

「……嫌」

「なんで？」

「それは……ふわあ……」

「おお、キレイなあくび。なんだ、眠いのか？」

「……うん」

「じゃあさ、コーヒーは飲まなくてもいいから火だけでも消したいんだが。流石につけっぱのままはまずいからさ」

「……分かった」

しづしづ、といった感じで奏が俺の上から退いてくれた。

「サンキュ」

ベッドから立ち上がり、コンロの火を消し、部屋の電気も消す。

「うし、じゃあ寝るか」

布団とベッドの間に、もう一人分くらいのスペースを作つて挟まる。

「ほれ奏。いらつしやいな」

「お邪魔します……」

ガサゴソと音を立てながら奏が俺の布団へと侵入してくる。流石にちよつと狭いな。

「わ、凄い。暖かい……」

「暖房要らずだな」

「ふふ、確かに……きやつ。……愉太郎？」

奏があまりにもポカポカしていたもんだから、抱き寄せてしまった。うは、あつた
けえ。

「うおおお、奏ゆたんぼ。あつたけえ。あ、暑くない？大丈夫？」

「う、うん。大丈夫」

「これなら安眠出来そうだわ。奏マジで暖かいな」

「そっか……」

俺の腕の中にすっぽり収まっている奏がうつらうつらとし始めた。暖かいのは俺だ
けじゃなかったみたいだ。

「……おやすみ」

「愉太郎……うん、おやしゆみ……」

え？天使？……あ、奏だったわ。



確か、シジユウなんちやらみたいいな名前をしていた鳥がピヨピヨと鳴いている。

「朝か……ねみい」

大きく欠伸を掻いて、背筋を伸ばす。

「さっむ」

布団の外はもはやシベリア。寒すぎる。

「うわ、くっさ」

昨日、結局香水の匂いを落とさずに眠ってしまった。

朝一番にこの匂い嗅ぐのはかなり辛い。

「……シャワー浴びるか」

冷えたフローリングをペタペタと歩き、廊下に出る。

背には、誰も居ない一つの部屋。

さて、今日も今日とて一日の長さは24時間だ。

ああ、憂鬱。

……シャワー浴びる前に学校に休みの連絡入れておくか。無断欠席するよりかはいいからかましだろう。

から元気ってこういうことかあ!……あ、違う?そう

……

今日は土曜日。休日だ。

「ま、最近は何日が休日だけだな。ハッハッハ!」

ベッドで仰向けになったまま、大口を開けて笑う。現在時刻は朝8時、爆笑しているが寝起きである。

何故だろう、今日はどうしても気分が良い。気分が良いというか、なんかこう、テンションが上がる。すごく昂る。

カーテンを開いて外を見てみれば、とんでもねえ風とえげつねえ雨。台風直撃、季節外れの大雨だ。

「気分はいいが………天気は最悪!これもまた人生ってことかあ?」

とりあえず、朝飯食うか。

ベッドからバツと飛び降り、台所に軽い足取りで向かう。さてさて、今日の朝飯は何を作ろうか。

確か、卵が結構な数残っていたはずだ。ああ、あと賞味期限の近いベーコンもあった

な。……よし、今日の朝飯はベーコンエッグにでもするとしよう。

台所に隣接した位置に置いてある冷蔵庫を開き、目当てのものを探す。

「ベーコンベーコンベーターベーコンはどこに入れたっけなあ……つとあった。あとは……卵はここのはず……。お、あつたあつた」

豚バラベーコンを1パックと卵を一つ……。いや2つだな。

右手に卵、左手にベーコンを持ち、すぐ横の台所に転がすように置く。

キッチンフックに掛かったフライパンを手に取り、コンロの上に置く。

フライパンに油を適量敷いて、うちのコンロはレバー式コンロなので、レバーを下方向に押し、火を点ける。これで準備は完了だ。

「うっし、作るか」



朝食後、歯磨きを済ましたその後、今日は特にすることもないのでとりあえずベッドの上に寝転んで目をつむってみた。二度寝の体勢である。と言っても、今朝は寝起きから元気いっぱいだった俺だ。全く寝れそうにない。

「……暇だな」

エネルギーが有り余っているので体を動かしたいのだが、生憎の悪天候。外出という選択肢は仄暗くなっている。

さてはてどうしたものか。目をつむったまま、首をひねって唸る。

「んー、どうしたもの……か。……あ」

首をひねり過ぎて俺が人間を引退しフクロウと成るのではないかというくらい考え込んだ辺りで、ハッとひらめいた。

「曲、作ろう」

神からの天啓である。ふとした思い付きが、俺の創作魂に火を点けた。



パソコンの画面に食い入るような姿勢で作曲作業を進めていく。作曲するのはかなり久しぶりで、なんだかんだでDAWには一ヶ月以上触っていなかったのだが……

「手がとまんねー……!」

フレッシュな音の組み合わせが面白いくらいに止めどなく湧き出てくる。作曲ってこんなに簡単なものだったっけ?

「……」に808突っ込んで……微調整微調整……あー、このグルーブ最高。天才か?も

しや」

ここ最近の出来事のせいで、制作は愚か音楽そのものすらが嫌いになりかけていたのだが、久し振りの作曲をしてみて、今一度再確認した。

俺、音楽が好きだ。

楽しい。ひたすらに楽しい。その一つの感情に心を支配され、時間を忘れて制作に没頭した。

◆

現在時刻は20時、夜である。

「もうこんな時間……」

制作を始めてから、今の今までのノンストップで作業をしてきた。そして気付いたら11時間くらい経ってた。集中力の鬼かよ俺は。

「飯にするか。ラーメン食いてえ」

昼食を摂ることをも忘れて制作に取り組んでいたの、べらぼうに腹が減っている。こういう、胃の中がすつかからかんの時は決まってラーメンが食べたくなる、こつてり系のやつ。なぜかはわからない。

窓の外を確認してみると、空はすっぴかり暗くなっており、雨が上がっていた。

「雨が降っていない……ということは」

外に出れるということだ。つまりそれは……

「天一にガンダ!!!」

マンションから徒歩五分くらいのところに天〇一品があるの本当に素晴らしい。駅
近より価値あるだろマジで。

防寒着を来て、外に出た。



夕食を終え、天下〇品から家に帰ってきた。

「あー、食った食った」

久々にラーメン食ったけど、やはり安定のコツテリMAXだな。美味が過ぎる。

「あー、ねみい」

ベットにござろりと転がると、自然と身体力が抜ける。今日はあまり動いていないの
にも関わらず、かなり疲れた。それと同時に、かなり充実していた。やりたいことやっ
て、やなことは考えずに楽しんで、1日が終わる。最高じゃないか。

仰向けのまま、目を閉じて、深呼吸をする。

「明日は何をしようか……」

ああ、次の朝が楽しみで仕方がない。



翌日。午前7時、天気は快晴。カーテンの隙間から差し込む太陽が眩しくてしょうがない。うつとおしい。

身体が重い。だるい。動きたくない。

目は冴えているのに、まぶたが重い。

「あー、つら」

天候とは真逆の、最悪な気分だ。なに？俺の感情は天気と反比例するシステムなんですか？

コンディション最低。マジ憂鬱。

「ぶあぁ……うう」

なんとか身体を起こし、壁に寄りかかり伝うようにして顔を洗いに行く。

洗面台の鏡の前に立つ俺の顔は、酷いの一言だった。一夜にして何があったんだよ俺の顔面。

俺が昨日と打って変わって寝起きからここまで弱っているのは、今日見た夢が原因だ
と思う。

ニーゴのみんなと、一緒にいる夢を見たんだ。

☆

その夢では、皆などとファミレスで楽曲完成の打ち上げをしていた。

『えー、皆さま、お手元のグラスを掲げてください。……はい、それでは、制作の完了を祝って……乾杯!』

『か、乾杯』

『かんぱーい!』

『……乾杯』

『乾杯。……って、なにこれ』

絵名が呆れたようにこちらを見つめてくる。

『なにしてそりゃあ……乾杯の音頭』

『いや、それは分かっているけど』

『なにか不満がお有りで?』

『むかつくわね……』

ジト目の絵名、かわいいね。かわいいからね、そのね、逸る気持ちが抑えきれない拳を収めてね。それが当たったら痛いよ?俺が。

『ちよつとく、なにイチャついてんのさー!』

瑞希がコーラを片手に茶々を入れて来たことよって絵名の剛拳を喰らわずに済んだ。助かった。ありがとう瑞希。

『はあ!?!どこをどう見たらイチャついてるように見えるわけ目腐ってるんじゃないの!?!』

『……絵名、早口になってる』

『焦つてら〜』

『ぶっ飛ばすわよアンタ!?!』

『いやくん、助けてゆたろー。絵名がボクのことをイジメてくるよう』

『おー、よすよす』

瑞稀がわざとらしく引つ付いてきたので頭を撫でてやる。よしよし、俺はいつだつてお前の味方だからなあ……

『……』

次の瞬間、隣に座っていたまふゆが俺の脇腹めがけて手刀をぶち込んできた。

『ぐべつー……なんスカまふゆさん』

『……ん』

無言で自分の頭を差し出してくるまふゆ。……ははーん、これはつまり、私の頭も撫

でろということだな。かわいいやつめ。

『……』

まふゆの頭を撫でてやると、彼女は依然無言のままだがどこことなく満足気な様子になった。

『いいな……』

正面に座る奏がその声を漏らしたのを俺は聞き逃さなかった。アイアム地獄耳。奏の方に腕を伸ばし、頭を優しく撫でる。

『今回の曲は奏の新境地を見たな。最高の曲だったよ。お疲れ様』

『あつ、うん。……えへへ』

『お待ちせいたしました——以上でよろしいでしょうか?』

『はい、ありがとうございます』

そうこうしているうちに、料理たちが到着した。

『よっし、食うか』

『わくわく! あ、ポテトはボクの近くに置いてね!』

『へいへい』

その後は、みんなでご飯を食べながら他愛もない話で盛り上がり、とても楽しい時間を過ごした。

幸せな一時だった。夢のようで、こんな時間はずっと続けばいいと思った。

☆

そして、目が覚め、今に至るといいうわけだ。

夢と現実の落差にくらって体調を崩した。ギャップ萌えならぬギャップ萎えである。

「辛いなあ……」

あたま痛くなってきた。吐きそう。